■特別寄稿

私の歩んできた道（上）

中平健吉（中42回）

竜丘の精神風土（エートス）

私は数年前、飯田市竜丘公民館報に「わが内なる竜丘の心」と題する小さなエッセイを寄稿したことがある。

実際のところ、私は竜丘についてそんなに詳しく知っていたわけではない。当時、竜丘公民館が編集発行した小冊子「丘のみちしるべ」を読んで、竜丘をあらためて再発見し、深い感動を受けたというのが偽らざる実情である。

この「丘のみちしるべ」によれば、竜丘では大正時代、小学校に下平好太郎という名校長がおり、その輩下に木下紫水、橋爪緑弥、小林八十吉等の秀れた教師がいて、自由画運動を始めたり、中央の「赤い鳥」の主宰者鈴木三重吉から認められて児童詩の投稿や綴り方教育を進めたり、唱歌に合唱をとり入れたりして、教育に新風を吹きこんでいた。

また、宗教界においても、佛教では念通寺の下平諦音上人、キリスト教では小林洋吉や〝竜丘の聖人〟とまで崇められた小島良三などを輩出したのである。

私はこれら先輩たちが故郷の竜丘の地で醸し出した、理想高く、清潔で、しかも簡素なその生活をこよなく尊敬する。

これは郷土に培われた精神風土である。そこには、ドイツの経済学者マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで分析したエートス（倫理的雰囲気）がつまっているように、私には思える。

私は竜丘の精神風土を分析するに、いかほどの用意もあるものではないが、すでに大正四（一九一五）年、竜丘に産業組合法に基づく日本最初の発電所が建設された

●なかだいら・けんきち
大正14年、竜丘生まれ。飯田中学卒業後、海軍経理学校入学。昭和24年、東京大学法学部卒業。司法修習を経て裁判官（判事）に任官。同47年、裁判官を退官して弁護士登録をし、現在に至る。

ということは、竜丘の精神風土に何か煌めくものがある微しではないかと、つい考えてしまうのである。

「しっかりやるぞ」の覚悟新たに

私は大正一四（一九二五）年生まれであるから、前記の諸先生方から、直接教えを頂いたということは、残念ながらなかったが、個人的には、小林洋吉と小島良三の両氏から影響を受けたのである。両氏から、というよりは、両氏の弟子である高橋三津平牧師からであるが、内容的には、小林洋吉、小島良三にキリスト教の伝道をした英国人牧師バークレイ・バックストンからである。

同牧師は英国国教会の宣教師であったが、来日後は教派としての伝道をせず、無教派の純福音（Evangelism）の伝道をした。私もその影響を受け、現在も無教派の立場に立っている。

大正時代に、竜丘にバックストン牧師が伝道をしたクリスチャンの集落があるらしいと知られるようになったのは、最近のことである。私が物心ついたのは昭和の初期であるが、バックストン牧師が竜丘に来て、小林洋吉宅を宿として、何日も集会を続けたという話をよく聞かされたものである。

当時はまだ、バックストン牧師の余薫が濃厚で、クリスマス祝会などには、四、五十名の信者が集まっていた。農村の教会としては珍しいことだったと思うが、その原因の一つに、先に述べた竜丘の精神風土（エートス）があったように思う。

竜丘にもクリスチャンに対する偏見がなかったわけではないが、私は、竜丘の地で、寛容な良識派に温かく見守られながら、純福音の信仰によって導かれた少年期を、貴重なものと感謝している。

昭和十七（一九四二）年夏、竜丘伝道館の高橋牧師と北沢啓司兄が、われわれ中学生のためにキャンプを計画してくれた。それは、お二人とも言葉にはされなかったが、「天皇と神様と、どっちが偉いか」という、当時のクリスチャンを悩ませていた問題に対する心の備えをするためのものであった。

高橋牧師は、旧約聖書のモーゼの十戒から、神は唯一であり、人間の手で作った偶像を拝んではならないこと、新旧約聖書に従って国王を尊ぶべきこと、しかも死に至るまで忠実であるべきことを教えた。竜丘伝道館はバックストン牧師のEvangelismの忠実な承継者であった。

私たち中学生は、軍隊で相当ひどい目にあうだろうということと、竜丘伝道館出身の先輩たちを見習って、「しっかりやるぞ」と覚悟を新たにしたものであった。

中学５年の時、クラス対抗運動会で優勝。優勝旗を持つ中平さん

今回、本誌の編集委員から、「私の歩んできた道」について書くようにとの依頼を受けた。私は、バークレイ・バックストン牧師を起点とする、イギリスの信仰や思想との関わりを縦糸として、私の歩んで来た道を振り返るのも面白いかも知れないと思うようになった。

これを要約すれば、戦前は英国人バークレイ・バックストン牧師のEvangelism（純福音）であり、戦中は、イギリスのCollege Lifeに範を取った、海軍経理学校の生徒館生活を含む教育であり、戦後は英法のRule of Law（法の支配）を原則とする、英米の法律実務家（法曹）の研究と実践である。

しかし、一口に「戦後」といっても、すでに六十年も経っており、これをまとめるのは容易ではない。紙数もある程度は必要であろう。そこで本稿はひとまず敗戦までとさせていただき、さらに上下二回に分けて掲載させていただくことにする。

海への憧れ

伊那谷の子どもは海を知らない。その代わりに天竜川で泳ぐ。私は泳ぎが好きだった。小さな頃から天竜川で泳いでいた。海水浴をしたのは、小学校四年の時だった。川崎の親戚を訪問した時、海水浴に連れて行ってもらっ

た。川崎の扇島と逗子であった。海は川より泳ぎ易いというのが最初の印象であって、少々塩からいけれども大いに気に入った。泳ぎが得意になった。飯田中学に入学して、水泳部に入った。初めてプールで泳いだ。水泳の腕を磨いた。

中学四年になって、ボツボツ旧制高等学校受験に熱が入り始めた頃、同級生の中に相当海軍熱にとりつかれている者がおり、『耀く海軍生徒』という本を回覧して、熱っぽく海軍熱を煽り立てた。私も海水浴の快い感触が忘れられないこともあり、彼の一、二番目の賛同者になった。

中学５年の時の文化祭で「興亜劇」を行う。右から２人目

私は早速、当時通っており、万事を相談していた竜丘伝道館の牧師、高橋三津平先生に海兵を受験したいと相談したところ、「軍隊へ行くなら海軍がよいだろう。イギリスの海軍の偉い人に、バックストン先生の親戚の人がいるということを聞いている。日本の海軍にもクリスチャンがいることはよいことだ」と。ところが、私は近眼だったため海軍経理学校に回されたが、中学四年の時も、五年の時も合格できなかった。

諦めかけていた時に、当時、飯田中学から経理学校に進み、同校の教官をしていた松下通雄さん（中28回）から、「中平君はもう一寸のところで通るところだったから、来年、頑張るように」という連絡をいただいた。そこで思いきって浪人をして、もう一度経理学校を受験した。私は松下通雄先輩に深く感謝している。

クリスチャンは軍人に向かない？

一九四三（昭和一八）年、三たび海軍経理学校を受験した。学科の試験をすべて終わり、残すは口頭試問のみとなった。試験官は最後にやおら、「お前はクリスチャンだそうだが、クリスチャンは軍人に向かないのではないか」と、重々しく切り出した。その口調は、いかにも「海

中学４年当時の著者（右）と中学１年の下井田龍夫さん（左）

軍はクリスチャンなんか必要としていないんだ」とも受け取れなくもない意地悪い質問に私にはとれた。

私は必死で切り返した。「そんなことはありません。イギリス海軍の提督たちにも、ドイツ国防軍の将軍たちの中にも、敬虔なクリスチャンがいると聞いています」と答えた。試験官はやや驚いていた様子で、ややあって、大いによろしいとばかりに頷いた。

察するに、彼は私がクリスチャンであることを否認すること、即ち私がキリスト教を捨てることを期待していたのかも知れない。予期に反して反撃してきたので、一寸狼狽したのではないか。そしてすぐ冷静に考えれば、お前の言うとおりだということで、合格の判定を下したことは間違いないと、私は確信したのである。

私は試験官の鼻を明かしてやったと、内心得意でなくもなかったが、それ以後、「クリスチャンが軍人に向くかどうか」は、私自身の真剣な問いとなったのである。

戦意なき愛国者

私が良心的兵役拒否の思想に触れたのは、敗戦直後のことであった。「戦意なき愛国者（Unwilling Patriot）」という言葉である。良心的兵役拒否の思想はアメリカの思想で、バックストンが日本に伝えた純福音の神学にはそれはなかった。イギリスのキリスト教は、唯一の神による支配の承認と、民意に基礎を置く王制への忠誠を強調した。バックストン牧師の指導下にあった純福音の日本の信徒たちも、神学的、思想的には、この延長線上にあった。

キリスト教国賊論が、特に満州事変以降の戦時になって、逆風のように日本に吹き荒れた。私の海軍経理学校受験の時の口頭試問も、その表れかも知れない。

しかしながら、根本的に考えて、私の海軍経理学校の受験は安易軽率ではなかったか、と戦後六十年間、考え続けさせられているが、まだ自分自身、納得できる結論に至っていない。

（「下」に続く）